

その外にも己が本もて寫させし書もいと多かるを、後にわが本を無くしたるもあれば、今度の擧につきて借してよと云ひやるに今は亡しつ、佗の庫に入れ置たれば出し難し、など斷りを立て借さず。物學ぶ上にては斯ばかり悲き事はあらじ。また佗と我が事に及ぶごに、儒學のよきを顯露ならず云ひ聞しめかつ人に贈れる消息ごもに、種々のあごなし言の悪事をさへに書載せるが、世に弘まりて我が道の妨害になれる事ごも甚多かり(中略)然れば中善かりし程も、常に快からぬ事ごもありけり

と言つて居るのを見るを、まごににあさましい心地がする。

(ホ) 鎮魂傳の序に

「おのれ若きほごよりすぐやかならず、つれいたはりがちにてありつるが、ごかくしてはたちはずぎぬれご、三そちをばいかゞはご、口あそびにもいふばかりにてなむありける。しかありけるにいつしか四十近くなりぬ。いまは此さかひはぬ越ぬご思ふほごに、やう／＼五十に近きほごあり、いつごなく病ものぞこりゆくまゝに、昔より思ひつるやうにはあらで、たゞいきに生きて、七十に三つあまる、弘化の二年といふ年の元日といふ日にあひぬ」

## エトルスキの遺跡

### ご其の文化 (下)

#### 文學士 濱田耕作

(ホ) チエルヴエテリの遺跡

ヴェイご共に羅馬より最も近き他のエトラスキの遺跡はチエルヴエテリなり、羅馬より西北約廿哩、パロの驛より瀛車を降りて北へ進むご數哩にして丘陵の端に達す可く、其の一端にチエルヴエテリ (Corve eiri) の村落あり、之れ古へのケレ (Crete) の遺蹟にして、中世「新ケレ」(Caere novum) (今のCariにて Cerveteri の東三哩) に對する「古ケレ」Caere veteris の義より轉訛せる者なるがエトラスキの此地に占據する以前より早く先住民(所謂ベラスギ)の據れるごころにして、

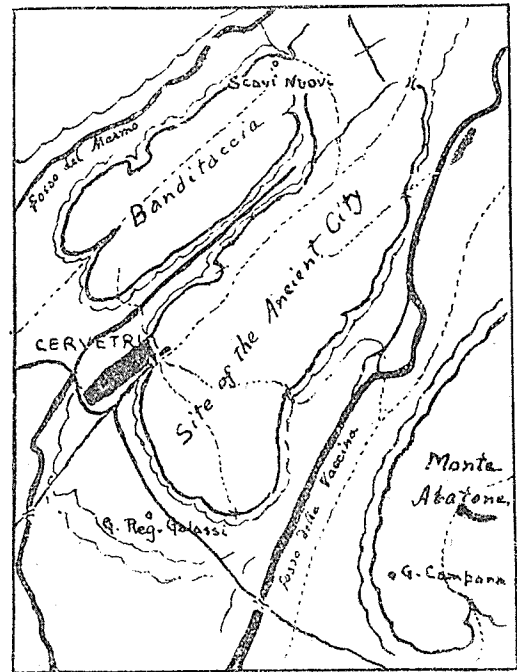
其の名をばアギルラ (Asylla) と呼び、中部伊太利に於ける最古の一市なりと傳ふ、後ちエトルスキ來りて代つて之に居る、ケーレの名の起源につきては確説なし、たゞストラポー等によれば、エトルスキの此の市を攻撃せし時、アギラの守卒、其の何の爲めに來れるかを知らずして、之を迎へて Xatpē (hail) と歓迎せしより、エトルスキ此地を占領して後ち此の語を以て名けしと云ふも、固より一個の言語的遊戯より生せる地名傳説に過ぎざるなり。

ケーレは *Purses* を其の海港として、希臘其他東方諸國と通商を行ひ、エトルスキの十二同盟市の一として重きをなせるが、當時他の諸市が多く海賊掠奪等を事とせるに、ケーレのみ其の類に入らざりしかば、希臘人は頗る之を尊敬したりと云ふことストラポーの書に見わたり、思ふに當時ケーレは一種の自由貿易港の觀を呈して、伊太利に

於ける希臘東方文明の流入する地點として、文明史上頗ぶる重要な意義を有せしなる可し、羅馬と戦ひ、又たカルタゴ人と同盟してフェニキヤ人と戦ひしが *Turpinus Saperbus* の羅馬を逐はるゝや彼は此のケーレに來りて (其の族此地より出し因縁よりなる可し) 隱匿せられたることあり、後ち他のエトルスキ諸市の多く羅馬と相争へるに係らずケーレは寧ろ羅馬と親密なる關係を持續し三六五年羅馬のガウル人の爲めに寇せらるゝや、羅馬のヴェスタの齋女 (*Veal virgins*) は神寶を奉じて此地に逃れ、後ちケーレ人の助けによりて羅馬に歸ることを得たり、而して *Caermona* (英 Ceremony 祭儀) の語は之より生ずると云ふ、後ち或は羅馬に抗したるあることありしが、遂に羅馬の屬領となり、中世に至りて漸く衰頽に歸す。

今日チエルヴェテリの村落の存するところは、古へのケーレの市街地の西南の一角にして、其の

アクロポリスの跡ならんと云へり、市址は其の東、北の臺地一帯を占め周回四哩、周圍に直方形の壁の石材より成れる石壁を繞らし、八門を開く今なほ其の遺跡を處々に認むることを得可く其の築造法は所謂エトルスキの特質を有するも、石材の大きさは必しも大なる方にはあらず此の市街地の東南方には Fosso della Vaccina の流ありて深き懸崖をなし、三個の小門より此の谷に降るの道を通ず(其の附近には古墳あり)、其の向ひはモンテ、アバト子の丘なり、西北方にも小流ありて谷を隔

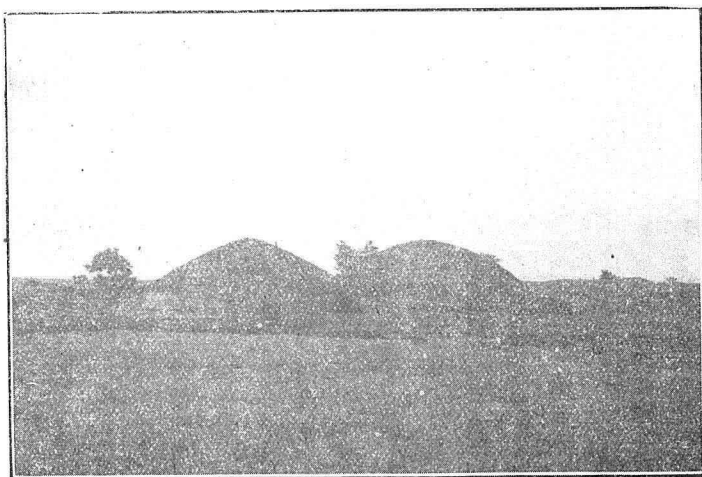


ケレー略圖 (モンテス氏)

て、ケレーの墓地なるバンヂタキヤ (Banditaccia) の丘と相望む、余は昨年九月十一日はじめて此の地に遊び、圖らずもバンヂタキヤの墓地の發掘主任なる技師メンガレリー氏 (P. Mengarelli) に會して其の懇切なる案内の下に自ら發掘の古墳及び其他の遺跡を見、なほ氏の熱心なる徳憑により十月七日より三日間チエルヴェテリに逗留して氏の厚意によりて、ケ

にして、是れ實に予が伊太利滞在中に於ける最も愉快なる一齣なりしを言ふに憚らざるなり。

ケールの舊市街地に於いては、前に記せる石壘の處々に殘れるもの及び門址の存せるを見るの外、其の中央に位する發掘の個所を訪ひたるが、こゝはヘラの神祠の址とて、テラコッタの破片等の散亂するを認む、羅馬ラテラノ博物館に此の地の劇場址より（一八四〇—四六）發見せられたるアウグストス、チベリウス、オクタビア、クラウデウス等諸帝の像及び、エトラスキ



第一圖 新發掘地全景 (濱田寫眞)

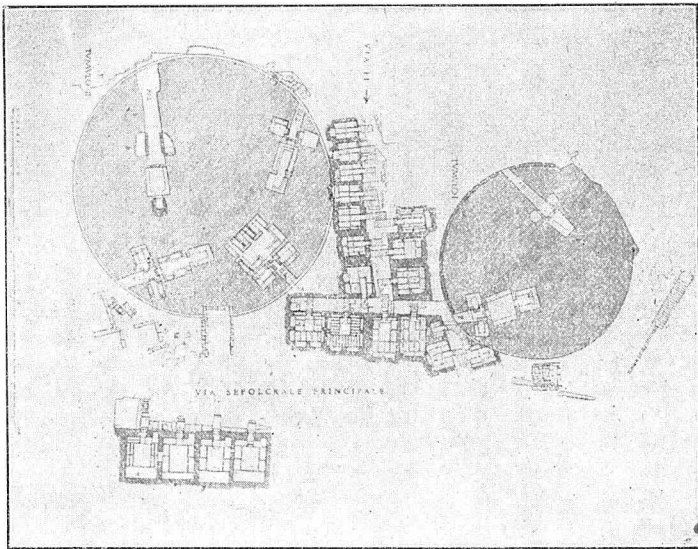
第二號 八四 (二七〇)

同盟市を神人化して示せる浮彫あり、されど此等は皆な固より羅馬時代の作品なれば、今は詳しくは述べず、又た墓地丘と市街丘との間の窪地に小高き一地點あり、テラコッタの奉獻像の破片多く散亂せり、恐らくは神祠の一の存せし處なる可し。

バンダタキヤの丘は實にエトラスキの古墳を以て被はれたる大墓地にして、其の數幾百千あるを知らず、此等の古墳には壁畫あるもの至つて罕なれど、建築の様式を示せるもの多く、且つ封土其他の外貌を保存せるは、コルチト、

キウジ等の古墳に於いて見る能はざる所にして、  
 恐くは此等よりも更に古き時代に屬す可きものな  
 らむ、殊に伊太利政府の事業として數年前より着  
 手せられたるメンガレリト氏の發掘は蓋しエトル  
 スキ古墳の科學的發掘の尤も大仕掛なるものとし  
 て、吾人は之によりて古墳の墓道に沿ひて配列せ  
 られたる状態、其他に就いて始めて完全なる智識  
 を供給せらるゝものなるを斷言す可く、エトルス  
 キ文化の新研究の機運の促進せらる可きを信じて  
 疑はざるなり、余は先づ此の新發掘の古墳を述べ  
 て、それより他の諸墳に言及せんと欲す。

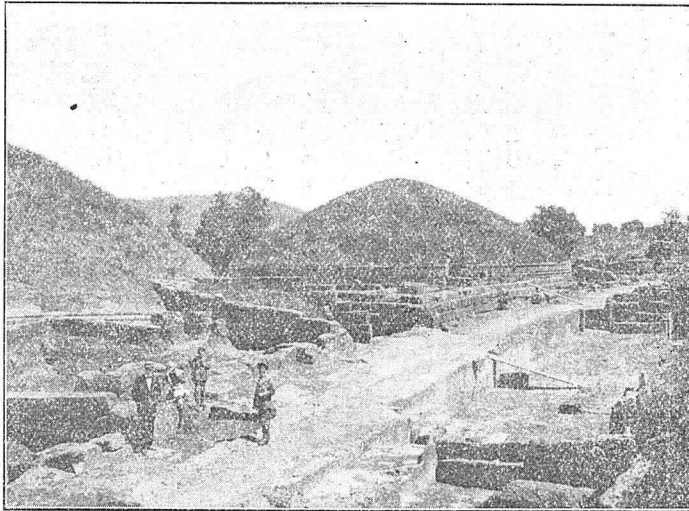
新發掘の地點はバンヂタキヤの臺地の東北端に  
 して、遠く吾人は二個の大圓錐形の墳土の聳立す  
 るを見る可し、發掘は此の二墳より始めて其の前  
 を通ずる大墓道 (Via Sepulchrale Principale) に沿ひ  
 て西南に進み、其の兩側なる數十の墳墓に及び、  
 今は又た前記二墳より東北の方面に進みて發掘を



(氏リレガンメ) 圖部一の地掘發新 圖二第

開始せられ、十數の人夫は徐々として其の事業に携はり倦むことを知らざるもの、如く既發掘の場所には柵を結びて妄りに入ること禁じたるが其の傍には草花を植ゑて、此の茫漠たる荒丘の上に數點の紅を點せるは發掘者の風流想ふ可きなり。(第二圖)

第一墳は圓錐形の封土を頂き内に二墓室を有し、基底には根生わのツーフホ石を切りモルヂンクて線形を繞らせり第三圖 第二墳も同じく封土を有し全体の大き遙に前者に勝り、基壇は更に複雑なる線形を示せり、第三圖 四墓室あり、第二墓を

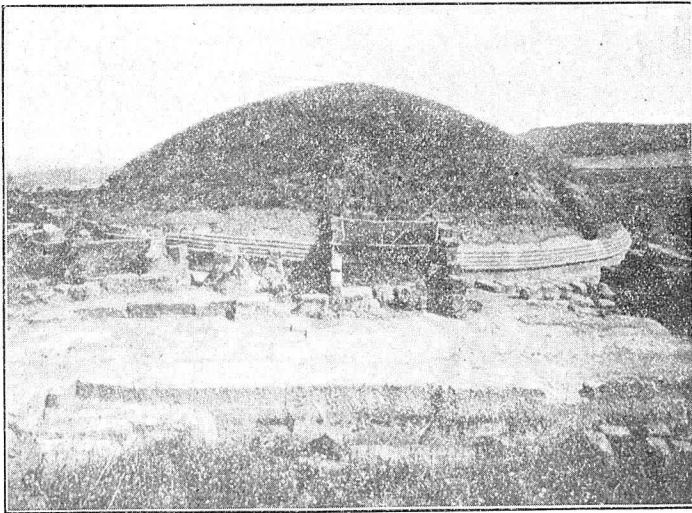


第三圖 新發掘地一部 (アリアナ寫眞)

以て尤も複雑なる形となす第四墓の内部に入れば、其の最も奥なる墓室はツーフホを切りて前後二室を作り前室には左右に石床あり、其の天井はヴォルトをなし中心に一條の縦木の狀を示し、其の構造、家屋の内部を示す、蓋しチエルヴェテリ古墳中家屋の構造を現せるものとして尤も簡古なるものを云ふ可し、而して第一第二兩墳共に其の東南面墓道に接して祭壇もしくは小祠の如きもの、跡あるは當時遺族等の隨時祭祀を行ひしを示すものと云ふ可し

又此の兩墳の中間にも小墓道ありて左右（殊に第二墳に接して多數に）に小墓室を作れり、第二墳の南には第三第四の小墳相接し、余の訪問せる時は第四墳の一墓室を發掘中なりき。

第四墳に近く大墓道に面して一個の墓室あり、之は早く發見せられし者にして Tom-ba dei Capicelli 即「雙柱の墓」云々 (Dennis, I. 255) 之は廣き前室ありて其後に小室三を開く、（中央のは稍々大なり）小室には各三個の屍床あり、前室の周圍には凡て十床を置く、小室の入口にはエト



第四墳 新發掘第二墳 (アリアナ寫眞)

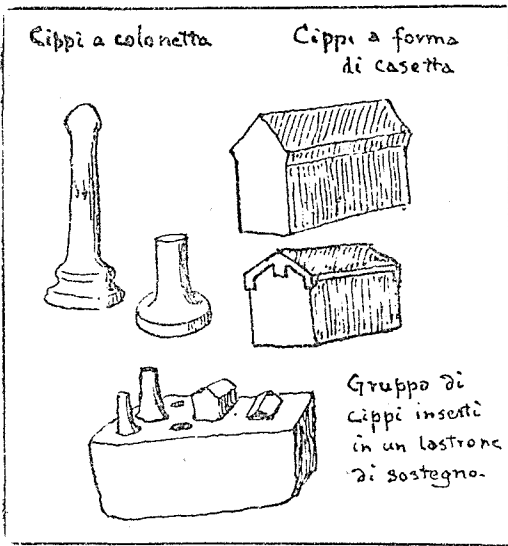
ルスキ建築一流の「 $\Gamma$ 」形の造出しあり、又た入口と入口との間には方窓を開けり、而かも尤も面白きは此の前室の中央には二個の石柱を切り出し天井を支へたるがその柱は十二若しくは十一の面を取り、柱頭は小亞スフリヤのネアンドリアの神祠に見る如き、一種のイオニヤ風のものにして而かも稍々コリント風を帯びたる所あり又た天井は五本の椽を渡し其の間に方形に斜線を交互に刻み、一見竹の如き材料を以て造れるものを模せるが如きは珍とす可し

此の外大墓道に面して多數の墓室を開けるが此等は各々多少の構造を異にせるも、又た大体に於いて趣を一にし、前後兩室を有するものと否らざるものとあり、何れも三四の石床を造し出したり、而も此等の墓室の入口に近く小石臺

息子の字あり、女子の字ありを見る。

此の大墓道を更に南すれば石材を切り取りたる窪地あり此の附近に三四の大なる墓室の地下に開かれたるを見る、此等は何れもデンニス氏の著書等に既に見たるものなれば單簡に之を記す可し、先づの

あり、その上に白大理石の棒もしくは小家屋形のもの置く、之をチツポ(Cippo)と云ふ、之は墓室内に埋葬せられし人々の碑にして、棒形のもは男子を現し、家屋形のもは女子を現せるは、其の上に刻したる人名によりて之を知ることを得可く、男子の名の終には *clan clan* 即ち



rotta del Tricinio には赤緑等の彩色ある會宴の圖、及び野猪等の浮彫あり、されど其の壁畫は消磨して明に認むるに難し(Dennis. I.247)次に *Gotta dei S. scofagi* には三個の

大理石の石棺を藏す、うち二個は棺上に横れる男子の像あり、一個は家屋の狀をなす、(此は女子)



もさなほ一棺ありしを羅此の大理石はCincoの山より出馬ツアチカン宮に移す。此の墓の所なりといふ。Apus族の墓ならんと思はる。

知る可きなり、但し此の記録はエトラスキ字あり拉丁字あり、後者は羅馬の勢力の此の地に及びて

北に有名なるGrotta de Tarquiniiあり、

後に葬られしものに屬するなる可し。

地下に入りて一室より右方に折れて一墓室あり、中央に二柱ありて周圍に十三の

第五圖

此の墓の傍に同じく地下に岩石を切り開きて作られし者にTomba della bella Architettura (Dennis

竈(各二床)を開き、

Grotta dell'Alcova

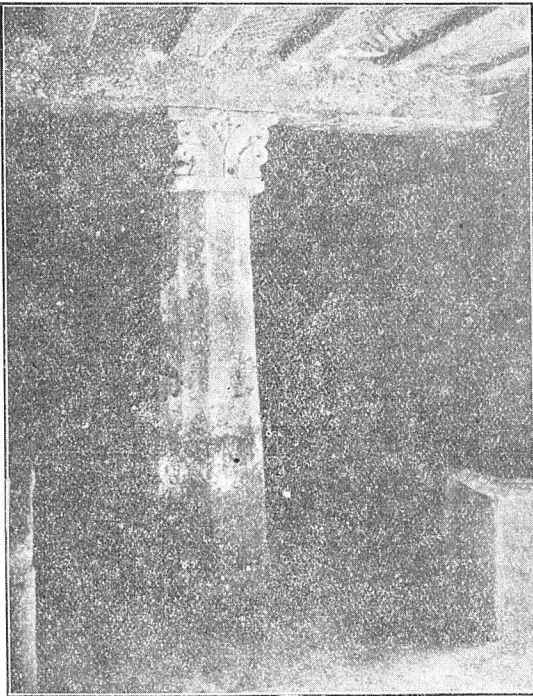
其の下の床上亦た屍体を置く爲めに設け

あり、其の名の如く頗る善く建築の状態

らる、而して竈の上下の長押壁、柱等到處に罍或は朱にて皆

を示し、堂宇の如く正面に二個の方石柱

なタルキヌスの族の名を記す、是れ此の墓名の起る所以にして此の族



(真寫チロフ) 墓の柱雙

テリーに於いて建築的構造を尤もよく現せる墳墓の一にして、壁畫の點に於いてはチエルヴェトリ

の

一はコルチトに劣ること遠しと雖も、此の建築を示せる墳墓に於いてはエトルスキ遺跡中此地に若くものあるを見ず、次に余輩は去つて再び第一墓の處に歸り來りて、其の傍に近く存在する有名なる Grotta dei Bessolieri につきて述べん。

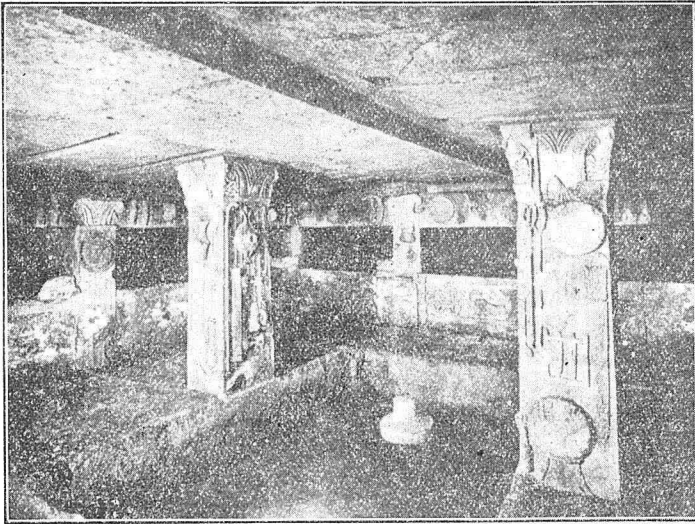
此の墓の入口には二個の石獅自然大あり、石階を下りて深く地中に入れば大なる室あり、長廿五尺、幅廿一尺、高七尺、タルクイヌスの墓より少しく小也、中央に二方柱を切出し、周圍の壁に龕を設け、各龕に床あり、石枕を置く、又龕の下の石壇にも屍体を置く可く



第六圖 ヤリド式柱の墓 (濱田寫真)

その床凡て卅二を敷ふ、此の龕と壇とを併存するはタルクイヌスの墓と其の作法を同じくす、而して彼にありては到處文字を記したるに反して、之は柱、長押等に彩色したる浮彫を以て埋めたる奇巧エトルスキの墳墓中隨一に數ふ可し、其の浮彫にせられたるものは楯劔甲冑等の武器より斧庖丁瓶皿紐其の他各種の什具等を網羅し、其の他犬鳥等の動物、神話中の人物等に及び、其の手法頗る寫生的にして善く眞を寫せり、又中央の二大柱其他の柱はイオニヤ風の柱頭を有すること、前記の「雙柱の墓」に似たり、エト

ルスキが寧ろ武人的の民族にあらずして平和的家庭的の享樂を喜び、其の日常生活の向上に意を用ゐしことは、彼等の實際に遺したる器物壁畫等によりても知らるゝ處なるが此の浮彫は更に此等を裏書して餘あり、彼等の文化風俗の研究に向つて此の墳墓の重要な意義を有するを見る可きなり此の墓は千八百五十年カムバナ侯の發見するところに於て、其の遺存する Cippo の文字によれば、恐らくは Matunas 家の人を葬りしものならむ。



(眞寫リナリア)

墓の彫浮

第七圖

Grotta delle Sedie e Scudi  
 即ち「椅子及楯の墓」は前記浮彫の墓の東南にあり、千八百三十四年の發見に係る外部には圓錐の封土を有す内には聯結せられたる五室あり二個の椅子を造出し、又々多くの圓形の楯の如きものを刻出せり、此の墓室の外近年別に一墓室を封土の他の部分に於いて發見す之を Tomba di Leon (獅子の墓) と云ふ、此の墓は三室あり、中央の大室の入口に近き天井は石を切りて扇形の垂木の形狀を示し頗る面白く、右方の室には剝落

せる獅子の壁畫の僅に残れるを見る、又た第一墳の東北大墓道の右手に一墓あり Tomba dei colonne dorico (ドリヤ式柱の墓)といふ崩壊せる墓室に

の遺物は、羅馬ヴァチカン宮博物館所藏 エトルスキの尤も古き時代のものとして、東方埃及フェニキヤ小細亞等の文化の影響を語るものにして、かの Paestum 發見のものと共に、古

二個の短きドリヤ式石柱の立てるを見る



第八圖 小墓の發掘

以上はバンヂタキヤ丘上の墓地に於ける無数の墳墓中其の尤も注意す可きもの

一斑なるが、チエ

は誰人か之を疑ふ可き、此の墓は千八百三十六年四月レグリニ僧正及ガラツシ將軍の發掘に係り、墓室は二個連結せる細長き直方形にして中央左右に圓形の小室

ルヴェテリの村落の東南數町の高地にも亦た古墳の存在するもの少からず、就中

Tomba Regolini Galassi (レグリニ、ガラツシの墓)は、今日其の見捨てられたる墓室の外見るに値するものなきも、此の内より發見せられたる幾多

を附す之は後世附加する所構造は他のツーフホの岩石を切り抜きて造れるに反して、之は巨大なる直方体の石材を積み上げたものにして、天井は左右の石壁

材を積み上げたものにして、天井は左右の石壁

材を積み上げたものにして、天井は左右の石壁

を漸次積み細めて、所謂コルベルをなすこと希臘チリントの倉庫に於けるが如く、此の構造は已に此の墳墓の時代の頗る古きものなるを示して餘あり、前室よりは青銅棺臺、同四輪小車、四十個の小土像埃及のウシユアチの如き性質のものならむ、青銅楯、槍、青銅香釜鐵三脚其他の器物出で、此の部分には武人の男子を葬りしことを證せるが、後室には側壁に青銅の容器を懸け、又た青銅香釜を置き、其の奥壁に近く黄金製の胸飾、腕飾、頭飾等ありて其の豊富壯麗なる、いかなる大貴金屬店と雖も此に若く物品を藏すること能はざる可しと言はるゝ計なり、又た銀の容器等も發見せらるゝ、この部分に葬られたるは蓋し尊貴の女子なる可きは此等の遺物に徴して明なる所なるが、銀器に存せる記録に *Lathia* 或は *Mi Lathia* と *エトルスキ* の女子の固有名詞の存するを以ても之を察することを得、而して此等黄金製の裝飾品等に現せる模様は今ま一々之を述

ぶるの暇なきも、孰れも埃及西亞もしくはフエニキヤ的の動物人物等を示し、此等諸地方の文化の影響歴々として疑ふ可からざるものあるを見る。  
(*Canina: Cere Antica; Griffin Monument di Cere antica* 等)

チエルヴェテリ發掘の主任メンガレリー氏は此等諸墓を一々案内して余に示せるのみならず、余輩が遠く日本より來りてエトルスキの古墓を見んとせるを喜びて、特に余の爲めに此のレグリニ、ガラツシの墓の附近に存在するエトルスキの尤も古き時代の墓を擇みて、之が發掘をなさしめ、余の目前に於いて其の口を開かしむ可く用意せられたるは、斯學に携るものに對する好意之に若くは無く、余の喜び何を以て譬ふ可き、此の墓は地下淺く一二尺の所に在りて石臼の如き外器(クストーデ)の内部に蓋を有する骨壺あり、石臼の周圍は小石塊を以て包む、骨壺の内部よりは骨片と共

に鐵の小刀(長四寸)出でたるのみなりき、之れ所謂 Tomba a Pozzo と稱する種類の墓なり、又た此に接して存在せる長方形の小石塊を以て詰めたる墓所謂 Tomba a fossa 二三を發掘せしも青銅の小さ留針(Ebula) 一二を獲たるのみにして、之が發掘に従事せる人夫は笑つて「此の墓の主は己等よりもなほ貧者なり也」と言へるは一同の哄笑を禁する能はざる所なりき、されど余は之によりてエトルスキの Archaic 時代の墳墓の構造を明にするを得たるをメ氏に深く感謝せざるを得ず。

ケーレの市街の臺地の東 Fosso della Vaccina の溪を隔てて Monte Abauoue の臺地あり、之れ彼のヴイルギリウスの詩中に見わたる「Sivanoの聖林」なりと傳ふ、今は林も無き荒原なれど、此處にも隨處にエトルスキの古墳あり、されど其の數はパンチタキヤの丘の如く多からず、メ氏は余を導きて此のアバトーチの丘の古きエトルスキの古

道に小馬車を驅りて、先づ其南端に近む Grotta Campana とて地中のツーフホを切つて開きたる墓を見る、天井は扇垂木の様をなし入口に近き左右に石の高き卓の如きものあるは奇なり、次に更に東北に進みて荆棘の茂りたる丘上に存する Grotta della Scia とて、石椅子を造出したる墓を見其の隣れる Grotta Tolonia 一八三五年トルニヤ公發掘を見る、此の墓は地下に二層に室を開き、下層には數室あり凡て五十四の屍床あり、其の廣大なる構造單に見る所なり、然れども不幸にして墓内潑水深くして進み入るを得ざりしは遺憾なりき。

### 三、文化

以上余輩はエトルスキの遺蹟につきて、其の見所の大要を述べたるが、之れを概言すれば市街は丘陵としては低き山地に設計せられ海岸に接近すること無く寧ろ其の港は市街より若干の距離にあり、市街のプランは其の所在の地形によりて必

しも一定せず、周圍に巨石の壘壁を繞らし門を開く、凡そ此等の諸點はエトルスキ以外の伊太利に於ける古代人民に於いても同様にして羅馬の如きも亦た然り、而して市街の中に建設せられたる寺院は其の建築材料の主として木材なりしと、テラコッタを以て裝飾せるとにより、多くの遺跡を止めざれど、ヴァイトルヴィウス其他により、大体に於て希臘建築に似たる構造にして、多少其の手法精神を異にするものありしが如し、又た住宅の建築は其の遺跡無しと雖も、墳墓の墳室の構造によりて之を察するに、材料は木を主とし天井等の裝飾も頗る意を用ゐ、寢床其他の家具の奢侈なりしことは、遺物によりて知るに難からず、市區の配列も亦た墓地の墓道等によりて推察するを得べし蓋しエトルスキも伊太利に移住せし其始めは、武力を以て勝れる人民なりしも、後遂に其の富盛に極むるにつれて、全く享樂主義の人民と化し去り

生活を安逸にして快樂を趨むるの傾向に陥れるより、彼等は文化に於いては寧ろ劣れるも、武力に勝れる羅馬人の爲めに遂に征服せらるゝに至れ精るは惟しむに足らざるなり。

エトルスキの墳墓は之を三類となすを得べし、即ち *Tomba a pozzo* (竪穴式墓) *Tomba a fosso* (溝穴式墓) 及び *Tomba a camera* (石室式墓) にして前の二者は古して後者は新し、火葬は古くして後ち土葬と併び行はるゝも土葬多くなる、思ふに古き簡單なる墓はエトルスキが伊太利に移住せる以前よりの土民の風にして、之がエトルスキに征服同化されて後も其の風を傳へたるものなる可く、之と同性質の墳墓の今日小亞リヂヤ、フリヂヤ地方に残れり以て彼等の起源を此方面に歸する説の一證とせらる、要するに此の墳墓の構造は彼等

即ち *Tomba a pozzo* (竪穴式墓) *Tomba a fosso* (溝穴式墓) 及び *Tomba a camera* (石室式墓) にして前の二者は古して後者は新し、火葬は古くして後ち土葬と併び行はるゝも土葬多くなる、思ふに古き簡單なる墓はエトルスキが伊太利に移住せる以前よりの土民の風にして、之がエトルスキに征服同化されて後も其の風を傳へたるものなる可く、之と同性質の墳墓の今日小亞リヂヤ、フリヂヤ地方に残れり以て彼等の起源を此方面に歸する説の一證とせらる、要するに此の墳墓の構造は彼等

の住宅を研究し、其の壁畫は彼等の生活を想像し其の副葬の遺物は彼等の文化を窺ふ可き最も主要なる材料にして “the history of an ancient people must be sought in its sepulchres” といはエトルスキに於いて特に適切なる語なるを感ずるなり。されどエトルスキ文化を研究するものに取りて困難なることは所謂エトルスキの古物と稱するものうち幾何が眞に彼等の造る所にして、幾何が他國民より輸入したるものなるか、又た之を模倣せるものなるかと云ふ問題なり、彼等は元來通商的民族にして、其の豊盛は貿易によりて得られるものなりき、彼等の國土は農業に適し森林を有するのみならず、北歐よりの貨物はエトルスキの市場に來りて、希臘フェニキヤの人民の之を媒介せることはエトルスキの主なる職業なりしが如し、斯の如くにして、希臘フェニキヤの商人の手を経て、東方及希臘の文物美術は滔々としてエトルリ

ヤに入り來れり、例へば希臘の土器はコリント式のもの及び其の以前より輸入せられ、所謂 *Attic* *Vase* と稱しその古墳より發見せらるゝ赤繪手等の土器はエトルスキ自身の拙劣なる模倣の外は皆希臘アテカ地方より來れるものに過ぎず、又た *Vulci* より發見の駝鳥の卵、*Palestrina* 發見のフェニキヤ文字ある器物コルネト發見の埃及の青釉の土器及スカラブの如きは、直接に此等諸國より將來せられたるものなることを示し、其他チエルヴェトリなるレグリニ、ガラツシの墓より出たる埃及若くは西亞風の意匠ある物品等は、東方諸國に於いて作られしものに非ずとするも、其の技術の影響に依れることは疑ふ可からず、其他希臘の文字、繪畫、彫刻等の影響のエトルスキの遺物に存立することは今更事新しく述ぶる迄もなし更に彼等は恐らくは間接に極東地方とも通商的關係ありしことは *Vulci* にて發見せられし一個の具



穀は、印度洋殊に主として我が日本<sup>〇</sup>の近海にのみ産するものなることを學者の研究によりて知られたりといふ、(Denis, I.iki notes)余は未だ其の書を見る能はざれど獨人某氏は、ピアツエントアより發見せるエトルスキの銅器に支那の八卦の圖ありと云へるが如き、兎に角彼等の通商的文化的關係の頗る廣大なるを告ぐるものに外ならず。

斯の如き外國關係を有したるエトルスキの遺物に向つて、學者或は彼等を以て全く美術的創見なき國民なりとし、其の製作せる遺物の優秀なるものは悉く之を以て他國の所産の模倣なりとするもの少なからず、殊にエトルスキの起源が寧ろ東洋にあることは、人種的僻見を有する歐洲學者をして、彼等が單に模倣的國民にして敢て文化上獨特の造詣なく、主として希臘的文化を反映に過ぎずなどすもの多からしむ、實にや誰人かエトラスキ文化に於ける希臘文化の影響の大なるを疑ふもの

あらん、而かもエトルリヤにて作れし一切の美術と工藝が希臘の移民によりてなされたるに非ざれば、エトルスキが其の原本を希臘等の國民より獲て、而かも自から模倣したるや明かにして、彼等が少くとも之を模倣して、或者は原本との區別を困難ならしむる程度に造詣せるものあるを否定す可からず、例へば一七三八年 *Palestina* 發見の有名なる *Cetra F. Cornina* は、其の銅筒の表面なる優秀なる毛彫を以て、優秀なるが故に希臘人の手に歸し其の脚部及捉手の類の稍々拙劣なる故を以てエトルスキの補加なりとするが如き意見の學界に承認せらるゝが如きは、余輩にして何故に其毛彫をもエトルスキの巧妙なる模倣として承認するを躊躇するに不可思議を感せしむ、況んや希臘本土に斯の如き精品の未だ發見せられざるものあるに於てをや。

兎に角エトルスキは青銅の製品に長じたりしこ

とは希臘人の古く之を記せるところにして、其の Candelabra (燭臺) Specula (鏡) 其他の容器等は、今日發掘せられたるもの其の數莫大にして、此等は主としてエトルスキの手によりて作られしや疑ふ可からず、歐洲の學者或はエトルスキの美術的意想の缺けるを極言するも、之れ正鵠を得たる言にあらず、吾人は彼等の製作せる燭臺其他に、希臘等に於いて見るを得ざる面白き意匠の存立するを認むるなり、繪畫彫刻に於いてもコルネト、其他のものには決して拙劣の作ならざるもの少なからず、(コルネト等より彼等の義齒を發見し、其の金冠金橋等の技術を有し、馬齒を加工して義齒とせるものあるを知るを見る)、所詮エトルスキは當時希臘に次ぎて世界に於ける最も美術工藝の發達したる國民なりしを否定す可からず、少くも當時希臘の美術を模倣し又た之を理解し得たる人民はエトルスキを除きて、之れ無かりしなり、

此の關係は恰も古代の日本人と支那文明との關係と趣を一にせるを感せしむるものあり、否なエトルスキが特に他の國民の有せざりし特殊の長所は黄金裝飾の細工に *amulated ornament* の尤も精巧なることを致せると、粘土テラコッタの細工に其の妙技を發揮せることの外、建築に於いてはじめて眞正のアーチを作り之を盛に應用せることなり、又た今日歐洲國民の東洋人に對して誇とせる婦人の位置を尊重するの一事は、當時希臘人羅馬人にも之れなき所是れエトルスキの獨壇場にして彼等は其の石棺上の肖像彫刻に於いてさへ常に男女同等に位置を與へたるを見るなり。

羅馬の建築が希臘のそれに比して新機軸を出せるは其アーチを利用せる點なり、而して是れ實にエトルスキの先蹤を逐ひたるに過ぎず、羅馬の彫刻の特異なる發達はその肖像彫刻にありき、而して之れ亦たエトルスキが其の源流をなせるものな

り、其他羅馬の文明は希臘文化の影響を受くる以前は殆ど全くエトルスキのそれを繼承せるに過ぎざりしなり、即ちエトルスキの文化史上に於いて挾有す可き動績は實に此の羅馬文明の搖籃をなせる點に於いて充分なり、彼等は羅馬に征服せられて後其の市街は破却せられ、歴史家なく文學の遺存せざる此の沈黙の人種は、渺茫たるカムパニヤの原野に離々たる荒艸の中に累々たる古墳を残したるのみなりしか、あらず、ミカリが研究したる處を眞なりとせばエトルスキと今日のトスカニー地方の人民とは其の頭蓋の性質を一にし、彼等の遺血を残せるものなりと云ふDante, Petrarcaは即ちエトルリヤの故地に生れ Giotto, Brunelleschi, Fra Angelico, Luca Signorelli, Fra Bartolomeo, Michel Angelo, Hildebrand, Macchiavelli, Galileoの如き文藝復興期の巨匠は皆なこれエトルスキの傳統をつぐものに外ならず、されば一面に於いて

文藝復興期は之をエトルスキの人種の復活といふも過言にあらず、吾人はデンニス氏と共にエトルスキが文化史上の意義決して尠少に非ざるを認めんと欲するものなり。(完)

【附記】 エトルスキの文化が其の起源に於いて希臘クリト島を中心するミノア文明若しくは其の後なるミケーネ文明と相關係せるものにして、之より分派する所ならむとは、近來學者の往々にして説く所なり、之を證明するの材料未だ充分ならざれども、吾人は最も興味ある問題として其の歸結を見んと欲す之に關しては他日別にミノア文化に就きて述ぶるの機會を得て詳述せん。

【附記二】 メンガレリー氏は余輩が本題に就きて講演する所あるを聞きて、チエルヴェトリの遺跡の大寫眞を十四枚を惠贈せられたるも、漸く本日之を落手して、講演の際之を會

衆に示すの機を逸したるは深く遺憾とする所なり、今ま本篇挿す所の寫真中二三を除きの諸圖は皆な此の惠贈の寫眞及羅馬にて氏より贈られたる寫真中より縮寫したるものに係る記して氏の深大なる好意に感謝の意を表す。

【附記三】 最後に三四の参考書を擧げんに、  
 已に記したる Martha の *Art erusque* 及 *l'archéologie erusque et romain* の外、*Dennis* の *Cities & Cemeteries in Etruria* を以て最も概括的のものとする可し此の外 *Boissier* の *Novelles Promenades archéologiques* 第一卷にコルネトの遺跡を記したる一章あり、頗る流麗の筆を以て面白く讀まる、又た *Cameron* 嬢の *old Etruria & Modern Tuscany* は通俗の書なるも簡便なり、参考圖集として *Montelius* の *Civilisation primitiveen Italie* 等あり、其他多くは一々の遺跡等に關する特殊の研究を記すのみ。(三月二日)

雜纂

朝鮮史の葉 (第四回)

文學士 今 西 龍

廣史第一集より第八集まで百六十冊中第七集第一冊より第十八冊に至るまで十八冊を除きたる百四十二冊に收むる書籍次の如し。

第一集

1 野史之流 2 春坡日月錄 李星齡

3 黃兔記事 李廷馨

第二集

4 朝野紀聞 徐文重 5 錦城日記

6 休窩野談 任有俊 7 聽松遺事 成連

8 耳目所及 申欽 9 公餘雜載

10 朝鮮風俗 李凌慶 11 磻溪雜識 柳馨遠